会員だより

世界遺産「ナスカ展」を鑑賞して

「ナスカの地上絵」それは古代世界が残した最大の謎です。

１９３８年、古代の用水路の調査をおこなっていたポール・コソックによって発見されました。

最初、地上からの調査で疑問を感じた彼は、飛行機で上空を飛びそれが何なのか確認しました。この南北50キロの高原には地上からでは判別できない巨大な放射線状にのびる直線や，三角形，クモやはちどり等の動物をかたどった図形などが数多く確認されました。

先端技術を駆使したバーチャルシアターでは、驚異の遊覧飛行でその地上絵を見ることが出来ます。

ナスカ文化は紀元前後から7世紀ごろにかけてペルー南海岸地方に展開しました。

ナスカ人は、自然界の精霊の生命は自然界の精霊の力の作用を受けていると信じていました。その精霊を理解し、なだめる力を持つ者がシャーマンで、彼らは幻覚剤を用いて精霊を見ることが出来ると信じられていました。

シャーマンの儀式は音楽、踊り、飲酒を伴い、作物の植え付けや収穫、死者や首級の埋葬の時に行われていました。

左の楽師の土器は、膝に太鼓、口でサンホーニャを吹いています。ナスカ独特の音律の音楽が聞こえて来ませんか。

ペルー南部海岸の砂漠地帯は極端に乾燥した気候で、人間の遺体や副葬品は自然の力で一千年にわたって保存されてきました。

本展では、このミイラと、既に開梱され、保存状態の良い成人のミイラ一体を紹介し、ＤＮＡ、レントゲンなどの調査結果による、ミイラ最新研究を紹介しています。

子どものミイラは、瞳が残っているほど、保存状態がよく、科学的調査の成果も示している。ＤＮＡの結果、ナスカ民族と日本民族は同じ系統の民族とのこと。

右のナスカ文化の土器は、戦闘で手に入れた敵の首級を儀式で使っているものと思います。土器の中には首級の口から作物が芽生えている絵もあり、死と再生が表裏一体のものであり、循環してゆくというナスカ人の思想が表されています。Ｓ．Ｏ

四季彩

ノウゼンカズラ（凌　霄　花）

中国原産。古くから薬として使われていた。

日本には平安時代の９世紀頃渡来。

オレンジ色の派手な花。蔓がどんどん延びていき、いろいろからみつく。

開花時期は６月２５日頃から９月１５日頃まで。

江戸時代の貝原益軒が、「花上の露　目に入れば　目暗くなる」と記述し、いかにも有毒の花というイメージがついたが、それは誤解で実際には毒はない。

凌霄花はとても寿命の長い木で、豊臣秀吉が朝鮮半島から持ち帰ったという木が、金沢市に樹齢４００年以上で残っているらしい。　漢名の凌霄花の「凌」は“しのぐ”。「霄」は“そら”の意味。蔓が木にまといつき天空を凌ぐほど高く登ることからこの名前がついた。　Ｔ．Ｎ

甘辛チャンネル

女性の服装

年々気温は上昇し、体温を超える程になり息苦しい夏日。衣服を脱ぎ捨てたくなる様な日々。

今、街を歩いている若い女性の服装を見ると「ちょっと、それって外で着て良いの？」と言いたくなります。上半身は胸、背中は三分の二ほど露出。ジーンズのパンツと言っても超短かくて同姓でも下世話な心情になります。

テレビや新聞で電車の中でチカン行為をした男性が犯罪者として刑事問題になっているのを見たり読んだりすると、女性である私はチカン行為をおこなった男性に同情してしまいます。

全く無防備な服装でどこに触られてもよい姿。彼女自身が「どうぞ…」と言っている様に思えます。色気が嫌気に感じます。

下世話になるかもしれませんが本当の色気は全部さらけ出すのではなく、いわゆるチラリズム？（造語かな）なのですね。

「茶摘み」の歌の歌詞に「茜たすきに菅の笠」とても趣のある色気です。絣（かすり）の着物の裾を端折って赤い腰巻茜色のタスキを着物にかけてそこから見える白い腕。とても慎ましやかな色気。今の若い女性の夏服姿は気持ち悪い！！　Ｎ．Ｙ

味ＷＡＹ

紫蘇ジュース

赤紫蘇三百ｇの葉はきれいに洗う。

沸騰した湯千八百ｃｃの中に紫蘇を入れて２～３分煮る。紫蘇は鍋から取り出して汁は一度漉す。

汁に砂糖三百ｇを加えて煮とかし、クエン酸小匙三杯を加える。灰汁を取って出来上がり。

冷めたら瓶に移して冷蔵庫で保存。

薄めて飲めば美しい色のジュースが出来上がり。焼酎をシソジュースで割れば、とてもきれいです。夏ばてにいい飲み物です。私はゼラチンで固めてゼリーを作ります。Ｍ．Ｋ

後記

皆様お元気でいらっしゃいましたでしょうか？

もう我慢の限界かと思われた連日の猛暑も、やっと何処かへ・・・？と。

一雨毎に生き返った心地がしています。Ｓ・Ｎ